

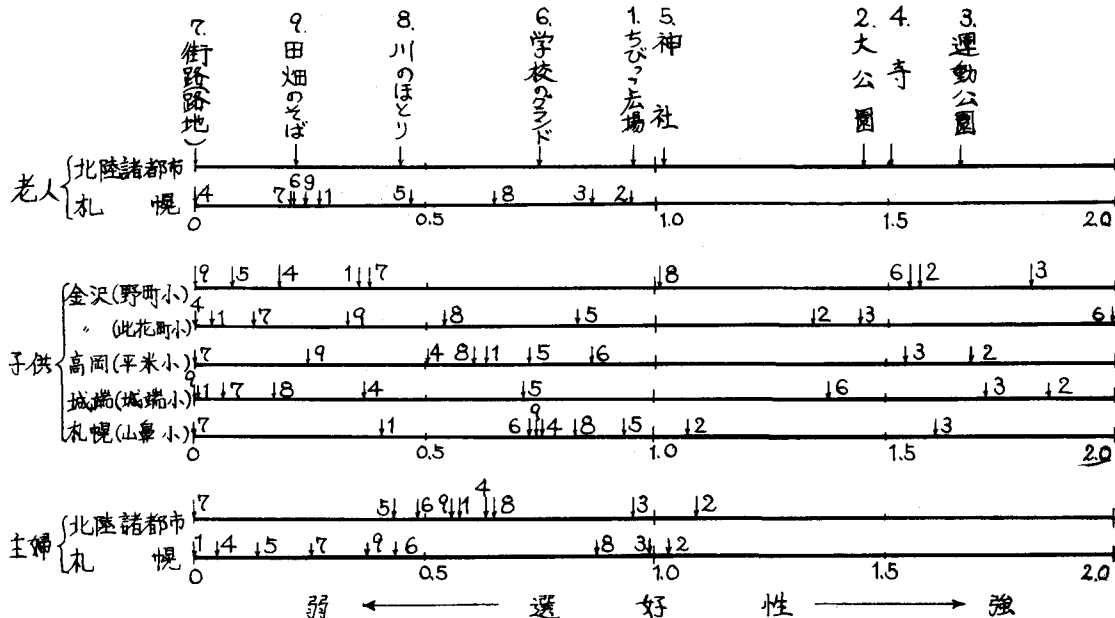
北海道大学工学部 正会員 小川博二
 岩手大学 工学部 正会員 岩佐正章
 富山県土木部 正会員 O. 神 正信

1. はじめに

現代の都市ではオープンスペースの不足に起因する各種の問題を生じている。それは代表的オープンスペースである公園の絶対量が不足しているうえに既存の公園が必ずしも利用に適していないからではなかろうか。本研究は北陸地方の諸都市において、地方の特色を生かしたオープンスペースを見出し、それらの活用の可能性を検討することを目的としている。この場合オープンスペースとは非建ぺい空間のすべてを対象とし、そのうえで利用を中心に考える立場上、永続性、公共性および親近性を兼ね備えたものとする。利用者としては、日常的に自由時間を多くもつ老人、主婦、子供にとくに注目し、これらの人々の生活のなかでオープンスペースの果たす役割について考察する。

2. オープンスペースの代替性

都市のオープンスペースに対する住民の選好性を知るためにアンケート調査を行った。(昭和49年10月)対象地は北陸の金沢市、高岡市、城端町の3市町と比較のため札幌市を加え、老人、主婦は戸別訪問による留置法とし、子供は各市町1～2校の各校5年生1クラスを選び、教室で説明の後、その場で記入してもらった。調査内容は、9種類のオープンスペースをとりあげ、歩いて15分以内において好まれる順序を求めたもので、方法としては対比較法を用いた。対比較法は計量心理学的方法であり、多数の試料を一組ずつ比較することによって



図一1 オープンスペース選好尺度図

(注) 金沢の2校について

野町小学校；金沢市伝統環境保存地区である寺町の寺院群が校下にある曹洞宗・日蓮宗寺院が多い。

此花町小学校；金沢駅前にある浄土真宗2派の別院を中心とする寺院群が校下にある繁華街にも近い。

それらを序列化する
ものであって、今回
求められた結果は、
図-1に示すとおり
である。

これを見ると北陸
においては一般に寺
院境内に対する選好
性が高く、とくに老
人の場合に著しい。
子供においては学校
のグラウンドの評価が
高く、各校とも上位
3位以内に入ってい
る。神社境内も比較
的好まれている。一
方ちび、こ広場の評
価は低く、街路ととも
に下位にあることは
注目すべきである。

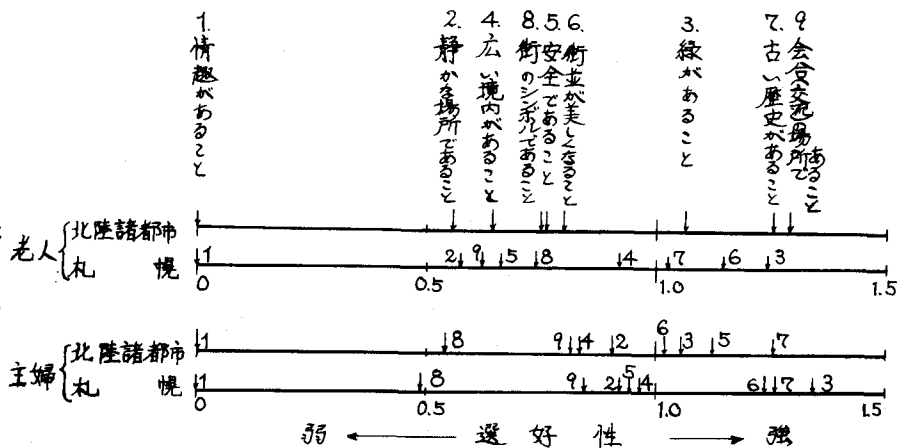


図-2 寺の属性選好尺度図

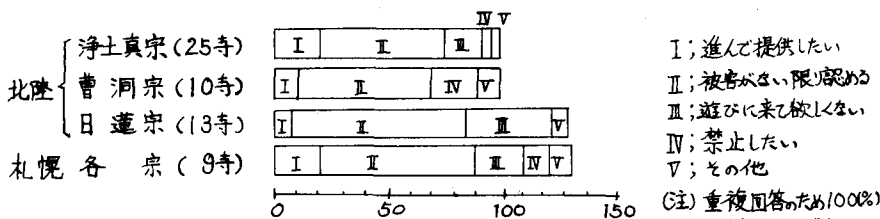


図-3 子供の遊び場となることに対する寺の意向(%)

尺度上で近い値をとるオープンスペースにはそれらの間に代替の可能性が考えられる。北陸においては、運動公園に対する学校のグラウンド、公園に対する寺社、ちび、こ広場に対する街路が指摘できる。

3. オープンスペースとしての寺院境内

オープンスペースとして寺院境内をとりあげて検討してみる。図-2は住民が寺をどのようなイメージでとらえているか、アンケートによって調査した結果である。方法は一対比較法である。これによると北陸に

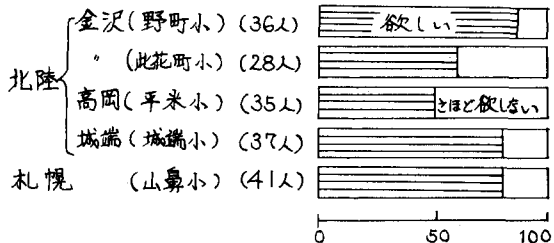


図-4 「寺で自由に遊ばせて欲しいですか」に対する答え(%)

においては寺院は老人の「会合(交流)の場所」、主婦にとっては「安全な空間」としての認識が高く、直接利用に結びついたイメージである。また、図-3および図-4に示すように、寺院境内は子供にとっても魅力のある空間で、寺院側としても子供に開放することに好意的な意向がほとんどである。金沢・高岡両市について、1/500地図でオープンスペースに適すると思われる寺院および神社を数えたところ、金沢市で152箇所、高岡市で60箇所であった。いま仮りに、1箇所につき0.03ha(西都市の小緑地の最小値)を子供に開放すると仮定すると、合計値は金沢市で4.6ha、高岡市で1.8haとなる。両市の児童公園の面積は金沢市15.2ha、高岡市1.3haであるから、これと比べて1/3~1/4倍とかなりの面積であることがわかる。そのうえ、これらの寺社は居住環境の悪化が著しい旧市街地に多いので、その価値は高い。このように北陸においては寺社境内はオープンスペースとして質量ともすぐれており、都市の中での役割を見直し、活用してゆかねばならない。

最後に本研究を進めるにあたり、ご指導・ご助言下さった北大工学部五十嵐日出夫教授、山村悦夫助教授、山形耕一助教授に心からなる謝意を表す。